應

天

門

応天門　　河出新書

昭和31年3月10日　第1刷発行　　¥ 120

著者　村雨退二郎（むらさめたいじろう）
東京都千代田区神田小川町3—8
発行者　河出孝雄
東京都千代田区神田三崎町1—1
印刷者　守安巌

発行所　東京都千代田区神田小川町3—8　株式会社　河出書房

東京印刷
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

応　天　門

河　出　新　書

著者略歴

一九〇三年鳥取県倉吉に生れ、二歳で父を失い非常に苦労した。少年時代から仏露文学に親しみ、十七歳の時短篇「鵜沢幾之進」を雑誌小説倶楽部に投じて中村星湖の選により第一席に推されたほど早熟だった。翌年上京生田春月の推薦で秀才文壇の新進作家号に作品を発表した。のち文光堂に入社して童話雑誌を主宰したり、抒情詩を書いたり、小地方紙の編集長をやったりしたが、一九三五年小説「泣くなルヴィニア」がサンデー毎日入選第一位となったので以後歴史文学に専念する決心をきめた。以来二十年「地底の暴風」「富士の歌」「庶天門」「漂泊族の花」をはじめ多くの歴史小説と評論を発表し、正統歴史文学の有力な闘将と目されるに至った。戦時中は文報の小説部会幹事、歴史文学賞選衡委員をつとめ、現在は日本文芸家協会、新日本文学会の会員、歴史文学研究会の理事長である。著書は「愁風嶺」以下二十六種。

目次

応天門……六
うずみ火……四三
ピント氏の昼寝……七一
からす異変……八二
茶聖とその娘……一〇七
火の女……一三六
二十三絃……一七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

応天門

応天門

一

平安京在住のまま、備中守の任についている、藤原ノ有貞の家人に、大初位下大野ノ鷹取という男があった。

もと右兵衛府の舎人になったこともあり、兵士の用に堪える強健なからだの持主である上、亡父の教育で読書、筆、算もでき、使い方では役に立つ男だが、弱気で正直すぎるためか一向に出世しない。主君のおかげで、やっと備中の権史生という、下級書記の地位をもらっているだけである。

事件の発端は、貞観八年閏三月十日のことだから、鷹取三十歳の時のことだ。家には、貧乏と夫の無気力を苦にして、年がら年中、愚痴ばかりならべている女房飛鳥売と、腕白だが父親に似て正直な、ことし八歳になる倅千依とがある。家は左京七条の第二坊、堀川がすぐそばを流れているので、夏はしのぎよいところである。鷹取はその晩、主君からの言伝をもって、かえりに大内裏の右兵衛府にまわり、大志の三津のなにがしという人にそれを伝えた。

もし鷹取が、そのままっすぐに、家へかえっていたら、あのような狂瀾怒濤の大事件に捲きこまれな

くてもすんだのだが、それを運命というのか、どうにも仕方のないことである。

右兵衛府の舎人には、旧友がたくさんいる。（ついでだから、奴らの元気な顔を見ていこう）ふとそんな気になった瞬間に、鷹取は終生の方向を一変してしまったのである。

府の舎人部屋に顔を出すと、珍らしい奴がきたというので、むかしの仲間がわッと集まってきた。単純、粗野だが一面率直で楽天的な兵士気質には憎めないものがある。鷹取はすっかり青春時代にかえったような気持になって、おもわず時をすごしてしまった。

ふと、彼は、魚板の甲高い音をきいた。夜警の舎人に、交替の時刻をしらせる合図で、新米のころは、それをきくたびに、動悸がうったものである。

（また女房に、文句をいわれるのか、やれやれ）

鷹取は、内心後悔しながら、おもむろに烏帽子をつくろい、さもおちつきはらったようすで、旧友たちに別れのあいさつをし、右兵衛府から出ていった。

築地の外に出ると、鷹取は急に、追い立てられるように、あわてだした。もう西にかたむいた十日の月が、内匠寮の大屋根の棟に、まさにふれようとしている。空には薄絹よりもうすい雲が棚曳いて、どこかから花の香りが、かすかにながれて来る。

「三十にもなって、和殿のように、うかうか日をおくっている人は外にはないぞや」

女房の、きまり文句が、耳の奥できこえた。鷹取は、ちょっと首をちぢめ、それから水干の袖に両手をさしこみ、うつむきかげんに身をかたむけて、足早にあるきだした。

豊楽院と八省院の、長い築地のあいだを通りぬけ、八省院の歩廊にそうて左に折れた。
八省院というのは、即位式や外国使節の朝見のような第一儀式に使用される大極殿と、その前に整然と配列された十二棟の朝堂とをふくむ一郭の総称で、南側と左右の一部分を、色鮮かな朱塗の円柱をならべた歩廊でかこい、その中央に全部丹朱を塗って、屋根には碧瓦を葺き、屋の棟の両端に鴟尾を飾った、豪華でけんらんな二層楼の正門が聳えている。応天門である。
十日月の弱い光りでは、ひるま見るような色彩と構造の美観はないが、そのかわりに、その山のような巨大さと、その鉄のようなどす黒さからは、おそろしいばかりの威圧が感じられた。
鷹取は、その正門の石段の前にさしかかった時、ふと、ふしぎな物の気配を耳にした。反射的に、足をとめて、彼は、応天門の楼上をふり仰ぎ、ひとみをこらし、耳をすまして、ようすをうかがった。
楼上の正面に、弘法大師揮毫の「応天門」の額が掲げられている。物音はその下の方からきこえて来る。人のささやきだ。それも、笹の葉ずれの音かとうたがわれるほどに、かすかなかすかなささやきである。
(はてな、この深夜に……盗賊かな?)
疑惑が、たちまち鷹取をとらえた。彼は、朱雀門の篝火の方を、ちらりと見た。だれか呼んできた方がいいかもしれない、というかんがえも浮んだが、もすこし正体がはっきりしてからでも、おそくないとかんがえ直し、袖の中から手をぬいた。そして、足音をぬすんで三段の石段を登り、円柱の蔭にかくれて、楼上の気配をうかがった。
門部が二人、門前を通りすぎた。すこしおいて、太刀を腰によこたえた検非違使の判官が、下部男二人

をしたがえて、朱雀門の外へ消えていった。

しばらく人足が絶え、もとの静寂がかえってきたとおもうと、まっていたように、楼上の人間がうごきだした。ゴトリと、厚い板でも置いたような物音。

「これ……しずかにせぬか」

はじめて、はっきりときこえた。中年以上の、濁った、重い、男の声であった。つづいて、だれか降りて来るらしいので、鷹取はいそいで、左手の歩廊の方へ退却した。

太い円柱につかまって、男が一人ずるずるとすべり降りた。つづいて一人、さらに一人、つごう三人降りてきた。

三人は、ちょっとあたりに、警戒の目をくばってから、最初の男を先頭にして、足早に石段を下り、そこで烏帽子を直したり、衣服の合わせ目をととのえたりした。

夜だから色は変ってみえるが、三人とも紅の粕で染めた褪紅の布狩衣に、黒の袴をはいていることがわかった。これは太政大臣、左大臣、右大臣、いわゆる三公に召使われる雑色以外には禁じられている制服だ。

しかし、もっとおどろくべきことがあった。

鷹取は、明るい方に向いた、最初の男の容貌と、その背恰好を見て、一度はじぶんの目をうたがったのである。

その男は、身長五尺あるかなしかという矮小の老人で、しかも容貌に著しい特徴があった。というのは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

両の眼窩が、骸骨のそれのように無気味にくぼみ、額が人並すぐれて広いのである。こういう人間は、一度見たらわすれるものではない。鷹取は記憶していた。だから、びっくりして、しばらく呼吸することさえわすれたのである。

（伴ノ大納言！）

雑色すがたの三人は、急用のある人間のように、風を切って朱雀門に向い、なかば走るようにして門を通りぬけた。

鷹取も、そのあとを追うて朱雀大路に飛びだしたが、もうどこへいったのか、そのすがたを発見することはできなかった。

彼は、また両手を袖にいれて、かんがえかんがえ足をはこんだ。大臣家の雑色でも、さわってはならないのに、伴ノ大納言ときては全然手がつけられない。

（あわてて官人を呼ばなくてよかった）鷹取はそうおもった。

（しかし、ふしぎなことをする方だ）

ひるまでも、むやみに登ることを許されていない応天門の楼上に、深夜いったい何の用事があったのだろう。しかも、正三位の高い位をもち、大納言の顕職にあって、検非違使の庁の長官、皇太后宮大夫その他の官職を兼帯し、廟堂における実権は、三大臣さえも凌ぐと噂されているほどの伴ノ善男卿が、大臣家の雑色などに変装して、応天門に忍びこむとは、いったいどうしたわけか。

もちろん、理由があるにちがいないが、いくら頭をひねってみても、鷹取には全然想像もつかなかった。

「謎だ！　おれにはわからぬ」

ついに匙を投げた時、二条堀川の橋のたもとまできていた。

鷹取は、突然はるかうしろの方で、だれか高笑いをしたような気がした。なんだろうとおもって、うしろの二条大路をふりかえったとたん、大内裏の方角に当って、むくむくと立昇る真赤な煙りが目に映った。つづいて津浪のような騒音が、鼓膜を震動させた。

（応天門だ）

電光のようなものが頭の中を走った。理由のわからない恐怖がおそってきて、にわかに両足がわなわなとふるえだした。彼は追跡されている人間のように、一度橋を駈けわたったが、また引返してきて、大路を西に大内裏へ向って、疾風のように飛んでいった。

火事が、応天門でなければいいような、あればいいような、矛盾した希望が、走っている鷹取の頭の中で、ぐるぐる廻った。

朱雀門が、近づくにつれて、大内裏に向って走る人馬の数が、どんどんふえていった。衛府の官人とみえて、弓箭を帯し、騎馬を飛ばしていく者がある。太刀を腋にかかえて、人を突きのけかきのけて走る者もある。いまにも落ちそうな烏帽子を、両手で支えながら、ころがるように駈けていく庶人もある。それらの群衆が、朱雀門では先をあらそって、押しあいもみあい、叫び喚きののしり、戦場のようなさわぎを演じていた。

火事は応天門だった。

鷹取は、朱雀門をかろうじて通りぬけると、むっとする熱気の中に、棒立ちになった。

応天門の楼上は、すでに一団の火と化し、火焔は真紅の蛇のように、階下へ、歩廊へ、歩廊につづく栖鳳、翔鸞の二楼閣へと、さかんな勢でのびていく。

火に呼ばれた風が、火勢を間断なくあおり、煙と火の粉を、時々群衆に向って吹きつける。そのたびに、群衆は鯨波の声をあげて、どっと後退するが、風向がかわると、またもどって来る。朱雀門内の広場は、もうすっかり野次馬で埋まってしまった。それでもまだあとからあとからと、群衆が門前につめかけていた。

火は歩廊を伝って左右に延び、ついに、栖鳳楼と翔鸞楼に燃え移った。そのころになって、衛府の門部や舎人が、築地の内外から、二つの楼閣に向って水をかけはじめた。もちろん申しわけだけのもので、猛火を鎮める効果がないことは、だれにもわかっていた。

応天門と二棟の楼閣は、いまや轟々と地ひびきを立てて燃えていた。それは火の楼閣であった。荘厳な火の芸術であった。

二

応天門炎上の日から、十日ほどすぎて、花は八重ざくらの季節にかわった。

鷹取は、まだ西の空が明るいうちに、七条の家へかえってきた。めずらしく早いかえりだが、まためずらしく機嫌のよくない顔つきである。

隣家の戸口に、子供が四五人たかって、家の中をのぞいていた。客を呼んで、酒盛でもやっているとみえ、あるじの生江ノ恒山の濁み声と、きいたことのない別の男の声とが、かけ合いで歌をうたっている。恒山は、越前の郡司の一族で、伴ノ大納言家の出納をつとめている男だ。その地位を利用して相当私腹を肥やしているらしく、身分不相応の贅沢なくらしをしている。

鷹取は、足をとめて、きつく、

「千依ッ」

と呼んだ。子供たちの顔が、びっくりしたように、こっちへ向いた。倅の千依は、仲間をぬけて走ってきた。

「物乞いか、和主は」

べそをかいて、千依は頭をふった。

「なら、人の戸口なぞに立つな。もどれ」

鷹取は、足のほこりをはたいて上にあがり、千依は足を洗いにいった。

「きょうは早かったな」

こしき釜の下を焚いていた女房が、夫の険しい顔をふり仰いで、（きょうは、どうしたんだろう）といった表情をする。

「だれかきたか」

「ええ」

「だれだ」
「検非違使の庁の――」ぎょっとして、鷹取はおもわず着換えの手をとめた。
「なに？　……検非違使がきた？」
「フフ、だれも検非違使がきたなんていやあしないよ。検非違使の庁の、看督長を、むかししていた、ほら、和殿の幼友達の、茨田ノ可良麻呂殿がみえたといってるんだよ」
「なんだ、可良麻呂か。びっくりさせる」
「悪いことさえしなけりゃ、検非違使だって閻魔大王だって、ちっとも怖いことなんかありゃしないよ」
「だれが怖いといった。人のいうことをよくきけ。それより可良麻呂の用事は？」
「通りがかりに、ちょっと寄ってみたといっていたよ。別に用事がありそうじゃなかったね」
「あいかわらず遊んでいるのか」
「そうらしいね」
「遊んでくらせるのは羨ましい身分だ」
「甲斐性のある男はちがうさ」
「ふン、隣りの成上り者が羨ましいか」
「だれがあんな奴を……。悪いことをしなくたって、出世はできるよ。その気があれば」
鷹取は、相手になるのをやめた。そして土間におり、鉞をさげて裏に出た。手もとが見えなくなるまで、彼は薪を割っていた。

夜、千依が寝ついたのをみて、鷹取は女房を囲炉裡のそばに呼んだ。
「夕方、和主はそういったな。悪いことをしなくたって出世はできるって？」
「そんなことをいったかねえ」
「いったよ、たしかに」
「わたしは、曲ったことはきらいだからね」
「はぐらかすな、出世の話だ」
「じゃあ、悪いことをしないと、出世はできないというのかえ」
鷹取は、ちょっとかんがえて、
「出世した人間が、だれもかれもそうだといい切る勇気はおれにもない……が、人間という奴はだな、表ばかり見ていたら、とんだ見当ちがいだということを、おれはこの年になってやっと気がついた。じぶんの甲斐性なしの、いいわけをするんじゃないが、いま世間で下積になって貧乏している奴の方が、高位高官におさまって、肩で風を切っている奴より、よっぽど正直者だ。おれは、きょうほど腹の立ったことはない」
「お館で、朋輩といさかいでもしたのかえ」
「そんなことじゃない。そんな小さなことじゃない。……おい、飛鳥売、人がきいちゃいないだろうな」
「だれもきいちゃいないよ」
隣家の客は、もう引揚げたとみえて、ひっそりとしている。燈火代りの榾火が、女房の瞳に映って、ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com